

造山古墳の被葬者を探る（中）

「吉備海部は備中にいた」

NPO 法人福岡歴史研究会副理事長 石合 六郎

<はじめに>

前回は吉備の巨大古墳の被葬者を解明しながら、造山古墳群が吉備の海部の奥津城の可能性があり、この古墳群を舞台に、被葬者は造山古墳が黒日売命、千足古墳が吉備海部直であるとの仮説にたどり着いた。しかし、吉備海部は吉備氏と同族か別族かも両説ある。また、本貫地は邑久郡、なかでも神功皇后伝承を持ち、天然の良港・牛窓港を囲む古墳群との関連が取り上げられ「邑久郡本願地説」が喧伝されることが多い。造山古墳群が築造されたころ、吉備海部の本拠地が邑久郡なら、造山古墳の被葬者が黒日売命であるという説は成り立ちづらくなる。

ところが、「吉備海部の勢力範囲は生坂以南だ」とする古地図があることがわかった。全国4位の巨大古墳・造山の被葬者が黒日売命の可能性が一層浮かび上がってきた。

<1> 吉備海部は何処から来た？

大吉備津彦と稚武吉備津彦は播磨の加古川で忌^{いわべ}を据え吉備平定を祈ったという。吉備での上陸地については、記紀には記述がないが、地元の伝承地としては岡山市南区の妹尾の明神鼻が有力である。

そうするなら、吉備津彦命一行は海路での吉備入りとみてよいであろう。その場合、瀬戸内海という内海とはいえ、航海の技術者、のちの海部の支援なしには考えられないだろう。

吉備の場合、「吉備海部」がいた。海部が部民として歴史上登場するのは、応神朝とい

コラム 海部とは

「海人」は「海」・「海士」・「白水郎」とも記され、漁業と航海に習熟した海辺の漁民を指す。大陸・朝鮮半島との通交でも活躍している。

遠江国・信濃国・越前国より西に分布し、とりわけ代表的なものが紀伊国・淡路国・阿波国・吉備国の海部である。地方では海部直・海部首・海部公などに率いられ、さらに海部直などは伴造の尾張氏や吉備氏などに従属した。なお、直、首、公などの姓は伴造の姓に由来すると考えられている。

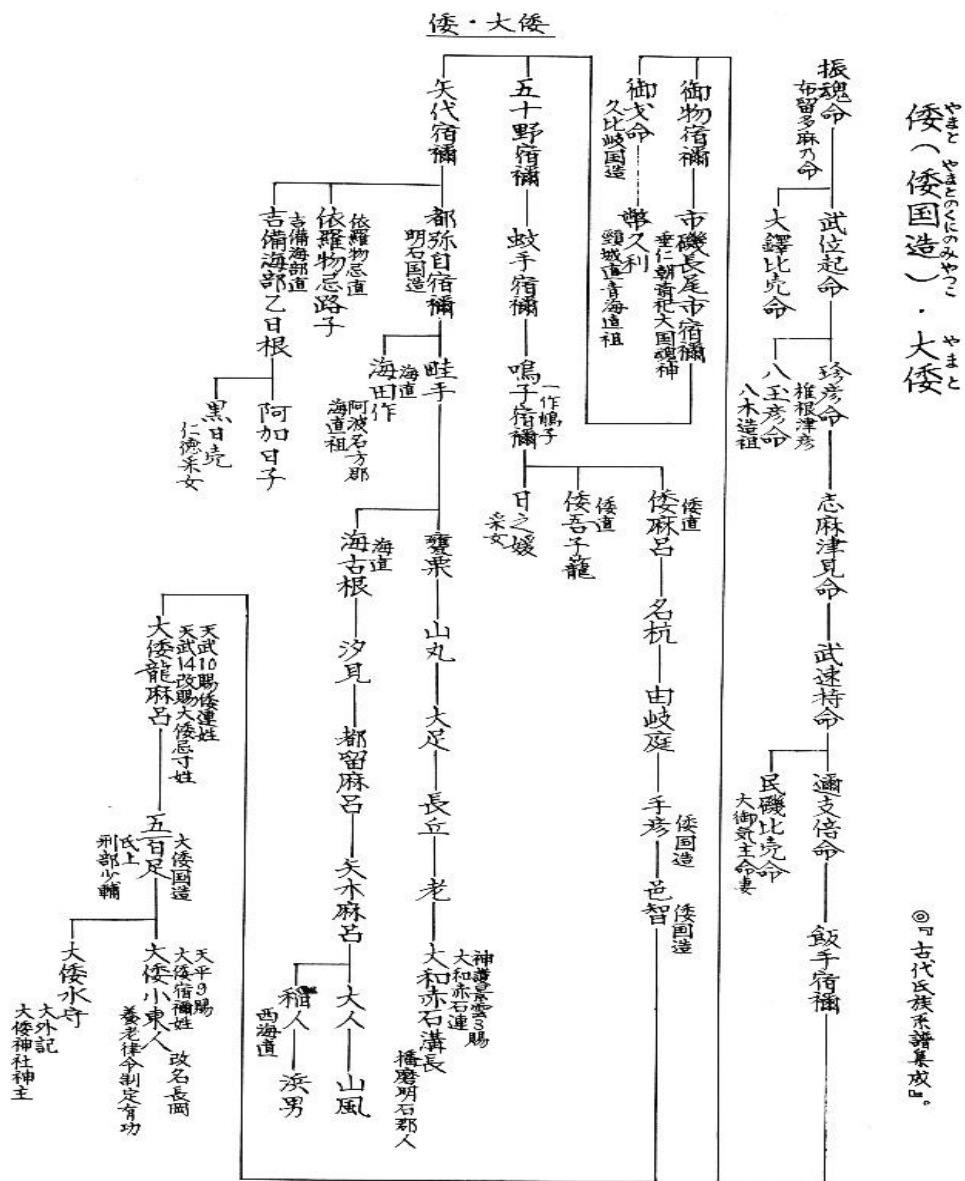
安曇氏は、『日本書紀』応神天皇3年11月条に「處々海人、訕嘯之不從命。則遣阿曇連祖大濱宿禰、平其訕嘯、因爲海人之宰。」とあるように、海人の暴動を抑えた功績によって「海人の宰」となったとされる。(Wikipedia から)

現代語訳=11月、あちこちの海人が訕嘯(大騒ぎして罵ること)いて従いませんでした。それで阿曇連(アズミノムラジ)の祖先の大濱宿禰を派遣して、その訕嘯を平定しました。それで海人の宰(統率者)としました。

われている。確かにそうだが、崇神朝（10代天皇）か、孝靈朝（7代天皇）の時期に、吉備津彦命一行の吉備入りが実現しているのだから、この時支援した海の民の残党が吉備に住み着いた可能性はあると思う。

◎系図から見る

海部の出自については、前回も書いたように古事記と新撰姓氏録の稚武彦の子供の彦狭島とする説と、先代旧事本紀に記されている神魂命の後裔との説があり、確証がない。そこで古代豪族系図集覧（近藤敏喬著）をめぐってみると、倭（倭国造）・大倭と題して下記の系図があった。



ここで注意することは「神魂の神」(註1)とは「天御中主神」「高御産巢日神」「神産巢日神」の神代七代のうちの造化神の一つ「神産巢日神」のことだ。「神魂」は出雲での呼び方だ。旧事本紀州の現代語訳では神魂(神祝)とあり、それも同一神のようだ。ちなみに大国主命を助けた「少名毘古那神」は古事記では神産巢日神の子、日本書紀ではその神を「少彦名命」と書き高御産巢日神の子とされている。

古代豪族系図集覧から引用した系図にある「始祖・振魂命」とは何者であろうか？ 先代旧事本紀のいう神魂命(神祝命)と同じであろうか。いくつかの資料を見たが結論は出なかったが、吉備津神社内にある御崎神社には、吉備海部直氏の祖とされる櫛振と、その子である小奇(女)と真振(男)が祀られている。「櫛振」と「振魂」と微妙に違う。

また、「振魂の神は安曇一族と関連つけられる八木氏の祖神で、後裔に椎根津彦がいる。椎根津彦と尾張氏は同族で、倭国造、大和神社後裔」とのネット上の書き込み(<https://ameblo.jp/oyasumipon/entry-12759994321.html>)もあった。系図の混乱は避けられないので不明とする。

この系図上には神武天皇の東遷時に水先案内を務めた珍彦命(椎根津彦=註2)もたしかにいる。その八代あとに吉備海部直(別号・吉備海部乙日根)がいて、二人の娘のうち一人が黒日売(仁徳采女)となっている。

この系図の正しさを正確に答えられる人は誰もいない。この資料から見る限り、吉備海部は古くからの「海の民」といえよう。すなわち、先代旧事本紀では吉備海部氏は邑久郡の国造になっており、神魂の後裔と書かれているのだが、この系図では始祖が「振魂」となっており、神魂の後裔であるかどうかははっきりしない。だが、吉備氏とは別族なのだ。

◎海部は2つの顔持つ？

前回の最後で海部の支配層と実働部隊が拠点を異にしている可能性を述べた。今回引用した「コラム 海部とは」にもあるように吉備海部は部民として伴の造である地方豪族(吉備氏)に仕えると同時に、大和朝廷からの直接支配を受けていたといえそうだ。その結果、同族ではない吉備氏とは主従関係を維持していくうえで同氏の広い意味での本貫地・備中での生活を選んだのであろう。

その結果、実働部隊の水主とは別の地に住む時

海部全国の分布一覧

畿内	右京・摂津
東海道	上総・遠江・三河・尾張・伊勢
東山道	信濃
北陸道	越前・若狭
山陰道	丹後・因幡・出雲・隠岐
山陽道	幡磨・備前・備中・安芸・周防・長門
南海道	紀伊・淡路・阿波・讃・土佐
西海道	筑前・豊前・豊後・肥前・壱岐

(吉田晶著「吉備古代史の展開」から)

期もあったのだ。各地の海部一覧（上の表）を見ると海のない信濃や畿内にも分布している。必ずしも沿岸部に拠点がなくてもよかったのだろうと理解した。吉備氏と朝廷の二重支配をうける2つに顔を持っていた。

そんな時、「海部の海部之男鹿百あまべのなかもが自ら描いたという古地図が岡山県立図書館に保存され、ネット上にも公開されている」ことがわかった。この古図については次項で詳しく検討する。

< 2 > 吉備海部はどこに住んでいたか

吉備海部は牛窓湊がある邑久郡が本貫地というのが定説のようにいわれてきた。筆者はこのシリーズで、備中誌の記述から、それを否定し次のように主張してきた。



生坂地区の
google 地図

岡山市北区足守の深茂の谷には応神、仁徳両帝が行幸している。季刊邪馬台国140号の『吉備津彦命伝説を追う』では足守の歴史に詳しい郷土史家の池田克己氏著書の引用として『粟井の柏尾②』には、朝鮮で反乱を起こした田狭を征伐に行った海部直赤尾の本拠地がある』と紹介した。備中誌には「吉備海部直赤尾居址 今ハ此地をカシヲと云 日本書紀雄略卷七年吉備上道臣田狭任那の國司となり、援兵を求めて新羅に入んとす 天皇田狭臣おとぎみの子弟君と海部直赤尾とを遣つかわして新羅を征伐せしむ時に田狭弟君と叛心を露す 弟君の婦樟媛其夫ふくすひめそのおととを殺して赤尾と百済の献ずる所の手末才伎テスエノヒトを將ひきひて復命カヘリゴトを申すと云々」（「備中誌」下1675）とある。

さらに筆者の仮説として「仁徳帝の訪れた吉備海部の屋敷は、谷の入り口に近いところにあった。かがり山①といわれる所だ。そこが仁徳帝と黒日売の逢瀬の地でもあったのだらう。その後、吉備海部直一族は、かがり山の地から柏尾へ本拠地を移していた」とした。そして、今回、生坂（倉敷市④）以南を勢力範囲である古地図があることを確認、この地と接する平田（同⑤）にもゆかりの地があったことが判明した。

吉備海部羽島はしまの場合も、羽島（現倉敷市③）に本拠地を移し、名前にもなったと思われ

る。(黒丸数字は、8ページの地図上の場所を示す)。

羽島より先に登場する吉備海部直難波^{あたいなにわ}も地名から「難波」を名乗ったのだろうが詳しいことはわからない。日本語では地名を呼称とする例は多い。名前から本拠地をたどることができた代表的な例ではなかろうか。

この仮説は吉備のアカデミズムからは全く受け入れられそうにない。岡山大学教授を務めた吉田晶は著書「吉備古代史の展開」の中で、「海部の本拠地は牛窓のある邑久郡である」(第5章三「吉備の海部について」の要旨)との論考を発表している。

< 3 > 海部の^{お お こ ち ず}大古地図があった

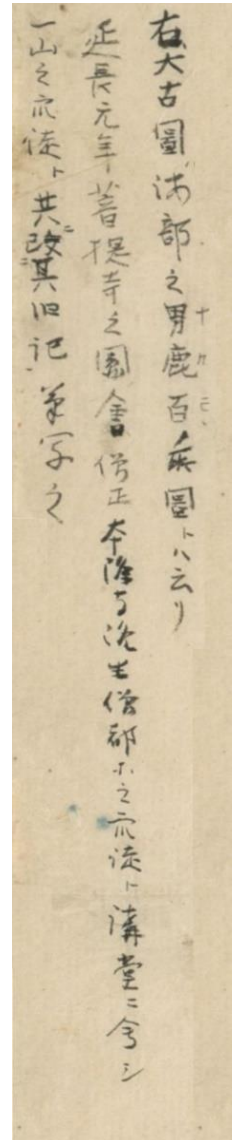
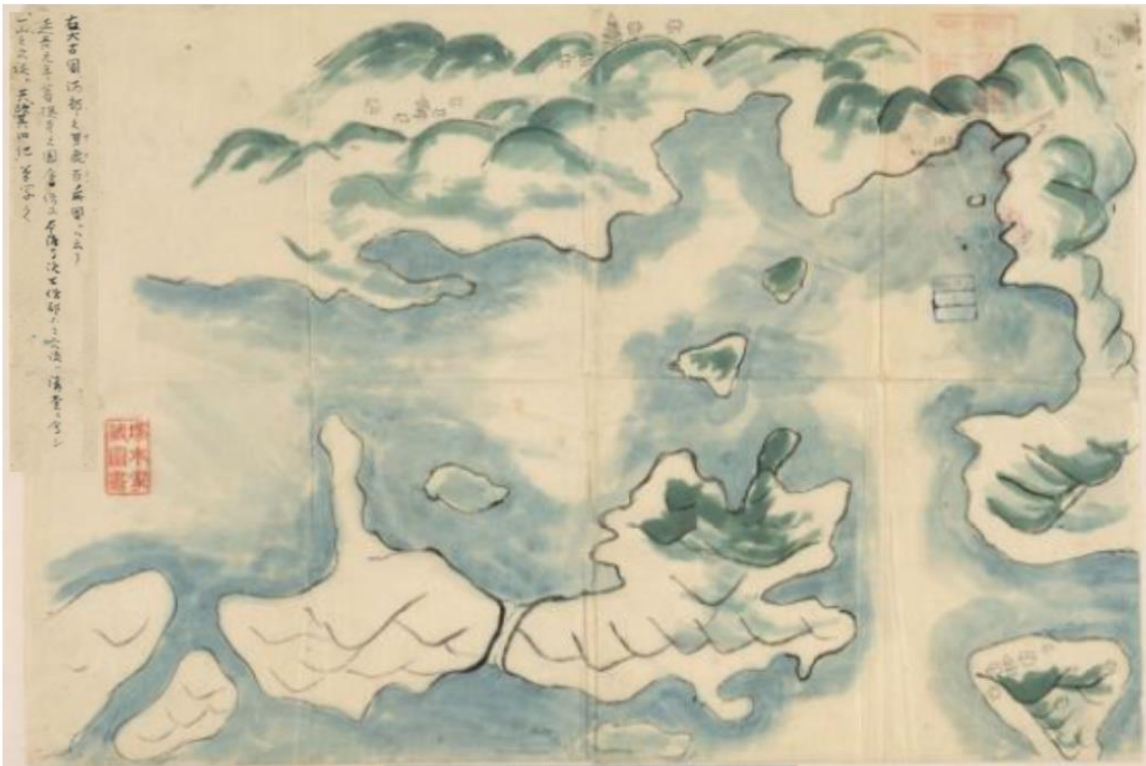
◎どんな古地図なのか

印象的には地図というよりは、絵図という雰囲気だ。古地の左上の方には次のように記載されている。



図

(右が拡大写真) ⇒



岡山県立図書館に保存されていた「吉備国海部古地図」 縦37×横53cm (折りたたみ15×20cm)。左は古地図の肩に書かれた文字部分を拡大したもの。同図書館が運営する岡山県デジタル百科で公開されている。公開アドレス <http://digioka.libnet.pref.okayama.jp/detail-jp/id/kyo/M2004093016430542333>

上が原文、下に読み下し文。。

右大古図ハ海部之男鹿百ノ所図トハ云リ
延長元年菩提寺之圓會僧正本隆寺隆生僧都等衆徒
ト講堂ニ會シ一山之衆徒ト共ニ改旧記筆写之

おおこず あまべのな かも えがく いえ
右の大古図は海部之男鹿百の図 ところと云り、

えんちようがんねんぼ だ い じ の えんかいそうじよう ほんりゆうじりゆうせいそう ず
延 長元年菩提寺之圓會僧 正、 本隆寺隆 生僧都

しゅう と こうどう かい いちざんのしゅう と とも その
らの 衆徒と講堂に會し一山之衆徒と共に其の

きゅうき これ
旧記を改め之を筆写す

この文には延長元年（西暦 923 年）のこととして、^{あまべのな かも}海部之男鹿百が描いた^{かいたず}図を、菩提寺の僧正らが講堂に集まって、古い地図に誤りはないか、検討し直したうえで描き直したとしている。

清書した絵なのだろうが、現代の地図と比べると稚拙に見える。

この絵図の下に描かれている島は、吉備の穴海を構成する児島（古事記では^{こじま}小洲、現在は干拓により穴海がなくなり、児島半島になっている）と思われるが、現実の地形とはかなり異なるようだ。そのころの地理的理解はこの程度のものなのかもしれない。

◎古すぎる「延長」の年号

岡山県立図書館が運営するデジタル岡山大百科に掲載され、次のような説明がついている。

「タイトル：吉備国海部古図（KM300／2）」

図1枚：37×53cm（折りたたみ15×20cm）

郷土情報の種類：画像

画像公開者または公開団体：小早川秀雄（写）（コバヤカワヒデオ）

この図は、塚本吉彦氏旧蔵のものである。裏面に『吉備足守、小早川秀雄自筆』と記されている。元々は海部之男鹿百アマベノナカモが持っていた図だと考えられる。延長元年は、西暦 923 年である。菩提寺の圓會僧正、本隆寺の隆生僧都についてはよくわからない。『吉備津彦神社史料 文書篇』所収の鬼城縁起きのじょうえんぎうつしにも圓會僧正えんかいそうじょうと隆生僧都りゅうしょうそうず(*1)の名がみえ、延長元年 12 月 5 日の年月日が記されている。海部の地については、窪屋郡生坂村より南側だと『備中誌』に記している。吉田晶氏は、吉備海部直氏の本拠地は、邑久地域だと主張している。ちなみに『古事記』仁徳段の黒媛伝承の黒媛は、吉備海部直氏出身である。鬼城縁起に出てくる。隆生僧都の寺院は本覺寺となっている。

(* 1) 鬼城縁起寫の隆生僧都の寺院は本覺寺（註 3）となっている。

作成日：江戸末期」

場所：岡山県倉敷市, 岡山県笠岡市, 岡山県井原市, 岡山県総社市, 岡山県早島町, 岡山県浅口市, 岡山県里庄町, 岡山県矢掛町

NDC 分類 291.75:岡山県

(<https://digioka.libnet.pref.okayama.jp/eol/detail-jp/kyo>)

<筆者注意書き>吉田晶（よしだ・あきら）氏 1925年、兵庫県生まれ。1949年、京都大学文学部史学科卒業。大阪電気通信大学教授、岡山大学教授、甲子園大学教授を歴任。2013年没。吉備海部の論考は『吉備古代史の展開』（塙書房、1995年刊）が数ある。【主要編著書】『日本古代社会構成史論』（塙書房、1968年）、『古代日本の国家形成』（新日本出版社、2005年）など。

◎謎の海部之男鹿百あまべのなかも

この古図の持ち主で、描いたとされる「海部之男鹿百」がいつごろの人か？ 少なくとも延長元年より古いということになる。全面的には信用できない。おそらく、吉備津彦神社所蔵の写本原本「鬼城縁起」が成立したとされる室町期とみる方が正しいであろうか。なぞの深い人物だ。といっても、備中誌の記録はいずれの場合も、何らかの“核”がある情報を伝えていると筆者は思っている。

◎古墳時代の地図と重ね合わせ

そこで古墳時代の地形と重ね合わせ地名を入れたのが次の地図である。



黄色い地図を重ね黄色か黄緑部分が当時の陸地である。その周辺の白い部分が、古墳時代以降に干拓や何かの理由で陸地化したもので、岡山市や倉敷の大部分が海（吉備の穴海）だったことがわかる。

筆者はこれまでも、「備中誌」は江戸時代末期の比較的新しい書であるが、小早川秀雄が信頼できる資料を持っていたことを信じてきた。それでも海部が足守や倉敷に住居を構えていたと言ったら、馬鹿にされそうだなとの思いはあった。それぐらい、吉備海部には牛窓のイメージが強かった。前期古墳の時代は備中にいたが、徐々に沿岸部へ移り、最終的には邑久郡に移っていたと考えていた。

◎窪屋郡生坂村より南側に

一部繰り返しになるが、吉備海部の本拠地は「窪屋郡生坂村より南側だと『備中誌』に記している」と記してある。備中の中枢部に海部はいたのだ。これまでの筆者の論考は間違っていなかった。

吉備の海部の居所は、天皇が一代ごとに都を変えていたのと同じように、「館」を移している形跡がある。造山古墳群が築かれたのは、生坂の北約7キロの所で、吉備の海部一

族の奥津城とみることは不自然ではない。

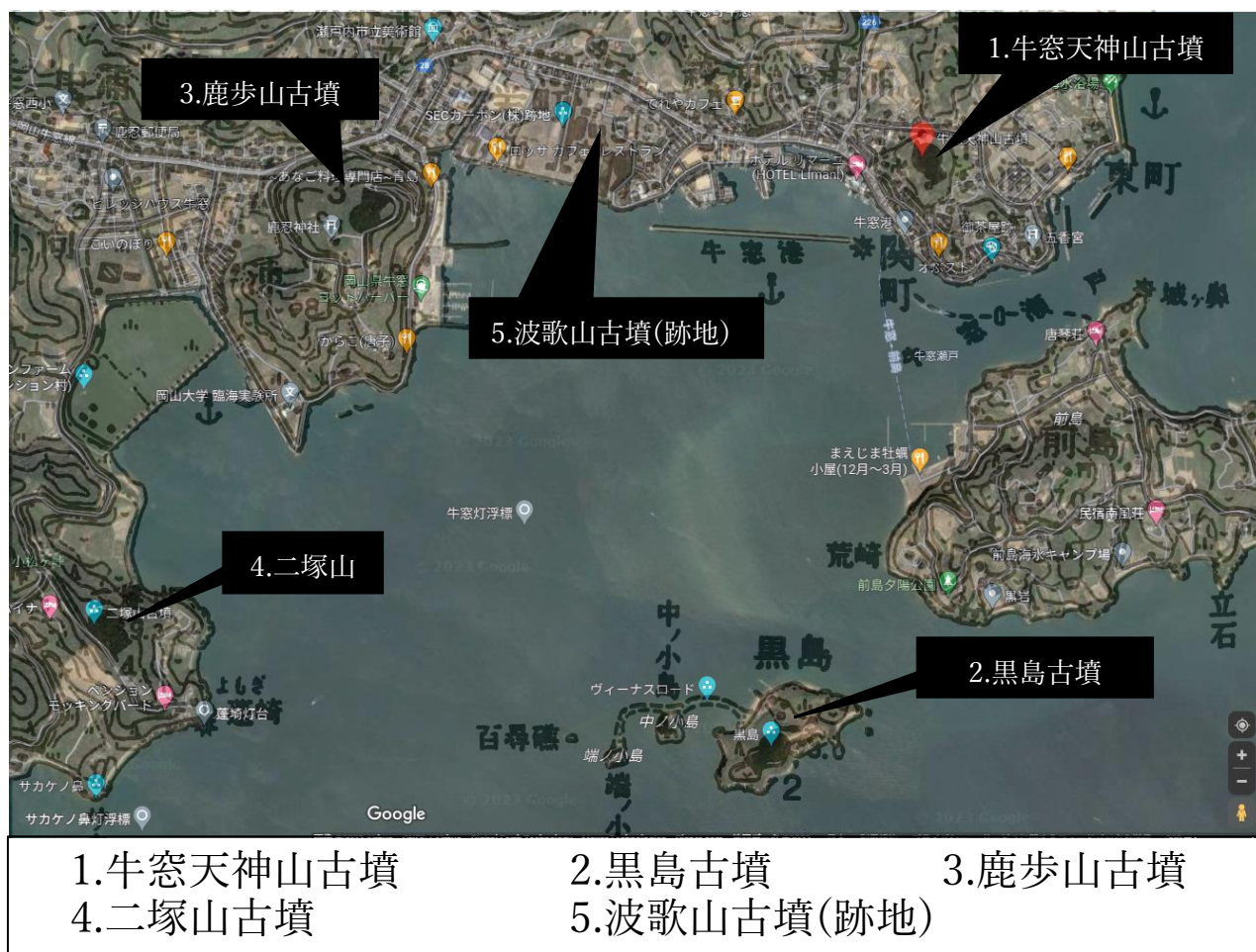
少し話が横道にそれるが、備中誌の窪屋郡の「生坂」「平田」の記録は思いがけない情報もあった。この地区に海部ゆかり集団として笠臣らも住んでいたことが紹介され、皇室ゆかりの職掌に仕えることができる人がいたらしい。海部という職業集団の一面をうかがわせる。

すなわち、吉備海部は吉備の範囲だけでなく、海部のネットワークで生きていたのだ。だから、肥後や朝鮮半島との交流を実現しているとみるべきだろう。

< 4 > 海の民が眠る古墳群

◎美しい海とともに

日本のエーゲ海と言われ眼前の島々、オリーブの丘と明るいブルーの海と空が今の顔だが、考古学者はこの丘と島には牛窓湾を囲むように前期、中期、後期の古墳、さらには6世紀古墳群までそろっているという。



◎考古学者の見解

〔瀬戸内市・牛窓〕吉備の考古学の大御所近藤義郎教授率いる岡山大考古学教室出身メンバーが執筆した「吉備の古墳（上）」（註3）の牛窓湾の項には、「古墳時代前期、中期、後期にわたって連綿と築かれており、この地に君臨した首長の墓を連続してみることができる。（前頁参照）

最初に造られたのは、①牛窓天神山古墳(牛窓町牛窓)である。牛窓天神社の背後に所在する墳長約八五メートルの前方後円墳で、後円部に比べて低く幅せまい前方部をもっている。墳丘には埴輪の破片と葺石がみられる。埋葬施設は明らかでないが、竪穴式石槨の一部と思われる板石が後円部頂に露出している。埴輪や墳形の特徴から、【前期後半ごろ】と考えられている。

続いて、古墳時代中期に造られた②黒島古墳(牛窓町牛窓)がある。牛窓湾に浮かぶ小さな黒島の最高所にある。墳長約八一メートルの前方後円墳である。墳丘の残りはよく、前方部前面には丘陵の堀切もみられる。現在、後円部のうえには武内神社があり、後円部の埋葬施設は明らかでない。一方、前方部頂には乱掘穴があり、竪穴式石槨の一部が露出している。墳丘各所から採集された遺物には、形象埴輪を含む各種の埴輪や須恵器、陶質土器の破片がある。これらの遺物から、【中期中葉頃】の古墳と推定できよう。

後円部の北側に接して、黒島二号墳と呼ばれる小円墳が存在する。黒島古墳とほぼ同時期の遺物が採集されており、黒島古墳に伴う陪塚と考えられている。次に、黒島古墳と同じく古墳時代中期に造られた③鹿歩山古墳(牛窓町鹿忍)がある。標高九〇メートルの鹿歩山山頂に位置する、墳長約八四メートルの前方後円墳である。前方部が大きく発達した形態で、後円部の直径約四メートルに対して前方部前端幅は約六四メートルもある。

また、前方部周辺には周溝しゅうこうが明瞭に観察でき、前方部前端側ではその外に堤しゅうてい帯(周堤帯)がみられる。埋葬施設は不明で、出土遺物は埴輪のほかに鉄製品が知られている。埴輪や墳形の特徴などから、【中期後半】の築造と考えられる。

続く古墳時代後期に造られた前方後円墳として、④二塚山古墳(牛窓町鹿忍)がある。牛窓湾西端の丘陵上に所在する、墳長約五五メートルの古墳で、埋葬施設は、後円部中央に全長一二メートル以上の大形の横穴式石室がある。現在は土砂がかなり流入して埋まっているが、奥壁側の天井部の隙間から中に入ることもできる。遺物は、円筒埴輪、盾形埴輪などの埴輪片のほか、須恵器、水晶製三輪玉たち(大刀の飾り玉)が採集されている。古墳時代【後期後半】の古墳である。

これら四基の前方後円墳に加えて、現在は破壊されてしまった前方後円墳、⑤波歌山古

墳(牛窓町牛窓)がある。墳長五八メートルで、前方部、後円部それぞれに竪穴式石槨が存在した。二塚山古墳に先立つ、古墳時代【中期末から後期前半】の古墳と考えられる。以上の前方後円墳のほかにも、多くの小規模古墳が知られている。そのうち最も群集しているのは、オリーブ園周辺に分布する^{あみだやま}阿弥陀山古墳群(牛窓町牛窓)であり、オリーブ園内の古墳については見学しやすい。古墳時代後期後半から終末期にかけて、五〇数基にのぼる小規模な円墳がつくられており、いずれも内部に横穴式石室をもっている。」(同書 p 27~29)

引用が少し長くなったが、同地区の古墳の築造状況は時期も含めてよくわかる。

(引用文中の黒丸数字と【】囲みの強調文字化は筆者)

◎瀬戸内市で最大長の古墳

〔瀬戸内市・長船〕瀬戸内市の邑久地区(旧邑久町)には前・中期の際立った古墳は見られない。6世紀の後期になっていくつかの横穴式古墳が見られる。これに対して長船地区は、牛窓地区のように年代のはっきりした古墳がそろうという状況ではない。

【^{けこうじやま}花光寺山古墳】(瀬戸内市服部)は、邑久郡内で最長、110メートルと突出している。葺石・埴輪を備え、後円部中央で前後に小石室が付設された長持形石棺が見つかり、三角縁神獣鏡や内行花文鏡、直刀、素環頭大刀、短剣、刀子、鉄鏃、銅鏃などが出土、東京国立博物館に収蔵されている。【4世紀後半】の築造。

瀬戸内市内ではないが、周辺の古墳として北東側に【前期古墳】の【新庄天神山古墳】(備前市新庄)がある。この古墳は花光寺山古墳とは現在は道路で分断されているが、本来は同じ丘陵上にあったものである。

花光寺山古墳から約一・七キロメートル離れたところに花光寺山古墳に後続する【鶴山丸山古墳】(備前市新庄)がある。この古墳は、遠く離れた福島県の会津大塚山古墳と同型の三角縁神獣鏡を共有しており、岡山県内でも有数の鏡(30面<現存17面>枚)を埋納していた。

このように花光寺山古墳周辺には邑久郡域を代表する前期古墳が集中する。しかし、それ以後の五世紀代の首長墳は少し空白があり、北約一・八キロメートルに五世紀末から六世紀初めの船山古墳があり、東約二・二キロメートルにほぼ同時期の油杉山古墳が築かれている。

◎馬門石でつながる

【築山古墳】は長船地区の東南部にある前方後円墳であるが、前方部が大きく広がっている。周辺に六世紀後半から【七世紀中葉】ころの須恵器窯跡群が多いが、この築山古墳は出土遺物および墳丘の形などから、五世紀半ころと推測されている。

内部主体は現状で竪穴式石室の一部が露出し、そのなかに家形石棺が古墳主軸に並行しておかれている。石室の大きさは一九二四年の現地を調査した梅原末治氏により長さ約二・四メートル、幅約一・五メートルと推測されている。そして天井石が三枚あったとあり、現場に残っている三枚の石材がこの天井石のようである。

石棺はこれまで奈良県と大阪府の境の二上産産の凝灰岩と推測されていたが、高木恭二氏（熊本県宇土市教育員会＝当時）らの検討により阿蘇山の凝灰岩（馬門石）であると考えられるようになった。

◎テラス上に築かれる

【うしぶみちやうすやま牛文茶白山古墳】は長船平野から南東に抜ける交通の要衝地にある。付近にはほぼ同時期の遺跡はなく、西約一・三キロメートルに土師茶白山古墳、木鍋山遺跡などがある。出土遺物と墳形などから、【五世紀末ころ】と推測される。最大幅約六〇メートル、長さ約六九メートル、高さ一～二メートルの馬蹄形のテラスの上に、古墳は築かれ、山側を向いた帆立貝形古墳。一九一二年、地元の方が主体部を掘り、竪穴式石室と思われる石室が確認されている。遺物は石室内からこぎね小札のよろい鎧・かいくしろ貝釧・すえき須恵器？ しじんしじゅうきょう四神四獣鏡、こんどうせいしがみもん金銅製獅嚙文(獸面文)おびかなぐ帯金具・鉄刀・須恵器などが出土している。

(以上平成10年刊「長船町史史料編(上)考古古代中世」を参考)

◎古代における「海部」らの記録

考古資料と文献を比較できるよう「古事記」や「日本書紀」などに登場する「吉備海部」らの記録を時代順(下表)にまとめてみた。

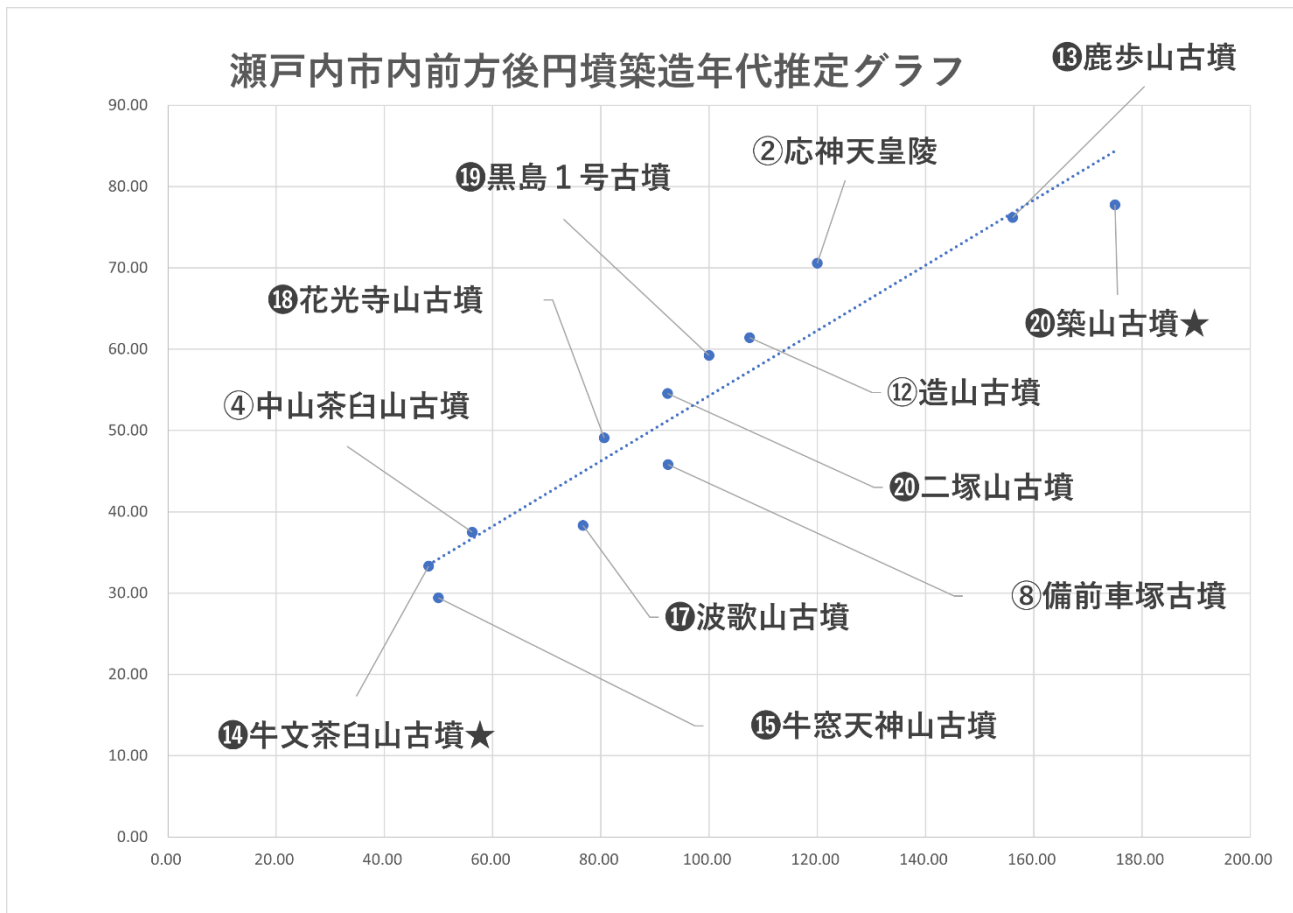
文献に見られる「吉備海部」の記録一覧		
年代	登場人物	内容
応神天皇の御代 (安本編年 410～425年)	大伯国造に佐紀足尼 (先代旧事本紀)	神祝命の7世の孫・佐紀足尼が国造を賜る。
仁徳天皇の御代 (同 425～438)	仁徳帝と黒日売命 (古事記)	黒媛は吉備海部直の女で、仁徳帝の宮廷に仕えて寵愛されたが、石之比売の嫉妬により本国に帰る。彼女を追って吉備にき

		た仁徳を「山方」の地でもてなす。
任那の国司・田狭の反乱鎮める（雄略7年＝西暦469年）	吉備海部直赤尾（日本書紀）	赤尾は吉備臣弟君とともに新羅への侵攻と百済才伎を招来する任務をもって朝鮮へ渡るが、父・田狭の誘いで弟君が王権への叛意を抱いたとして妻の樟媛に弟君が殺された後、樟媛とともに百済の才伎を招来した人物として、書紀本文はえがいている
敏達紀二年五月・七月・八月条（同572年）	吉備海部直難波（日本書紀）	難波は、欽明の末年から来朝していた高麗の国司を本国に送ることを敏達から任じられるが、日本海の波浪を恐れて使を海中に投じて帰り、偽りの報告をする。やがて真相があらわれて罰せられる
敏達紀十二年七月・十月条および同年是歳（同583年）	吉備海部直羽嶋（日本書紀）	はじめ紀国造押勝とともに日羅を迎える使として百済に赴くが、百済王の拒絶によって果せなかった。再び百済に赴いたとき、彼が韓語を解したことによって日羅と事前に相談することができ、日羅の計によって日本に迎えることに成功する。なお同様の記事は『太子伝暦』にもある。
齐明七年（同661年）	大伯皇女、齐明天皇（日本書紀）	齐明天皇が中大兄皇子らと筑紫に向かう途中、後の天武天皇の妃・大田皇女が、大伯で「大伯皇女」を出産、国造家だった吉備海部直が大伯皇女の養育氏族となる。
天平三年六月二四日（同731年）	海部などの戸座に時服料（類聚三代格卷一）	戸座に時服料を支給 「類聚三代格 天平三（731年） 阿波国 安曇部 壬生 右男帝御宇之時供奉 備前国 壬生 海部 壬生首 右女帝御宇之時供奉 備中国 海部首 生部首 笠朝臣 右皇后宮供奉 以前戸座等給時服料。冬人橡絶（ツルハミノアシキヌ）一足。綿六屯。夏人別橡絶三丈。 月料。人別三斗六升。 天平三年六月廿四日 国史大系
長和四年廿一日（1015年）	『平安遺文』収録「備前国司解案」	邑久 郡少領の交代を申請する文書「邑久郡司解」がだされる。海宿禰「共忠」と「恒貞」の名がみられる。郡司を世襲、海宿禰は海部直の後裔か。

（長船町史「編年資料・古代」から 安本編年はいずれもごろとする）

◎古墳の墳形で年代順に並べると

前方後円墳の年代を統計的に把握できる安本美典氏の「前方後円墳の縦横比率築造推定グラフ」を作ってみた。



瀬戸内市などの前方後円墳一覧

古墳名	墳形	古墳全長	考古学年代	備考
牛窓天神山古墳	前方後円墳	85.00	4世紀後半	花崗岩地帯で、前方部の崩壊が進み、4世紀古墳の位置にある。
花光寺山古墳	前方後円墳	110.00	4世紀後半	市内最大の古墳である。
黒島 1 号墳	前方後円墳	81.00	中期中葉頃	島にある保存状態がよい。
鹿歩山古墳	前方後円墳	84.00	中期中葉頃	比較的考古と統計手法が一。」
波歌山古墳	前方後円墳	60.00	中期末から後期前半	破壊が大きく正しい位置が出にくい。
牛文茶臼山古墳	前方後円墳 (帆立貝形)	48.00	五世紀末ころ	帆立貝形で墳形からは推定は無理。
二塚山古墳	前方後円墳	55.00	後期後半	一は古く出すぎている。
築山古墳	前方後円墳	90.00	七世紀中葉	宇土はS 等の馬門石の石棺が

				あり注目の古墳
鶴山丸山古墳	円墳	54.00	前期末	円墳であるが、30面の鏡を埋納していた。

(単位はm)

◎難しい分析結果

考古学者の年代と今回作ったグラフでは、牛窓天神山古墳の年代が大きく違った。これは牛窓天神山古墳の前方部が大きく破壊されているためであろう。須恵器が出土するなど考古学での判断が正しいと思われる。

あと、帆立貝形古墳の牛文茶臼山古墳は当然、古く判定されている。逆に前方部が大きい築山古墳は新しい古墳に分類されてしまっている。破壊の大きい波歌山古墳などもあり、あまり整合性の取れた情報は得られなかった。今回のデータからは被葬者の推定は無理だといえる。今後、情報の収集法から再検討し被葬者の推定を検討したい。

<おわりに>

最後に瀬戸内の古墳群と吉備の海部の関係を見たいと思っていたが、古墳数が吉備中枢部に比べ少なく、統計処理では海部との関係性を見ることはできなかった。

しかし、「吉備海部男鹿百」の古地図が出てきた。海部が部曲として2つの顔を持ち、吉備一族とも良好な関係を保ちながら、大和朝廷の外交を担い、海外にも雄姿をはせていたのだ。仁徳帝のお妃・黒日売を出した一族の誇りを形にしたのが造山古墳なのだ。

今年から造山古墳に残されている主体部に発掘の手が入る。「吉備の大王の墓」と叫ぶのだろうか？ ものはいろんな立場から見た方がよい。

次回は海部とかかわりの深い肥後からの情報を届けたいと思う。

<注釈一覧>

(註1) **神魂の神** 御中主神、タカミムスビに続く、カミムスビの神のことで、以上3柱を造化神とする。出雲神話では「神魂の神」と呼ぶ。

(註2) **椎根津彦** 神武天皇が東征において速吸門で出会った国津神で、船路の先導者となる。このとき、『日本書紀』では曲浦(わだのうら)で魚釣するところを椎の棹を授けて御船に引き入れて名を^{うづひこ}珍彦から椎根津彦に改めさせたとあり、『古事記』では亀の甲羅

の上に乗っていたのを棹をさし渡し御船に引き入れて槁根津日子の名を賜ったという。

速吸門については諸説ある。『日本書紀』では豊予海峡を指すと考えられており、大分県大分市佐賀関には、椎根津彦を祀る椎根津彦神社がある。『古事記』では吉備国の児島湾口を指すと考えられる。岡山県岡山市東区水門町には、珍彦（宇豆毘古命）の乗った大亀の化身とされる亀岩を祀るかめいしじんじや亀石神社がある。

（註3）**本覺寺**は鬼城縁起寫の隆生僧都がいる寺の名前。海部文書では本隆寺となっている。「鬼城縁起寫」から温羅のルーツを解説している「温羅伝説」の著者の中山薫氏は、「本覺寺」なかったとしているが、「本隆寺」の写し間違いかもしれない。

（註4）「**吉備の古墳**」（上）（下）＝2000年刊と「**こうもり塚と江崎古墳**」＝2003年刊。吉備考古ライブラリィシリーズ。備前、美作、備中、備後の古墳がほぼ網羅している。

プロフィール

いしあい・ろくろう PO 法人福岡歴史研究会副理事長 石合 六郎 昭和 20 年 4 月、岡



山県倉敷市児島田の口に生まれる。児島高校を経て立教大学文学部史学科を昭和 44 年卒。同年山陽新聞社入社、政治部、整理部、東京支社編集部などを経て、システム部署で新聞データベース構築に携わり、平成 17 年システム局次長で退職。同社嘱託を経て、川崎医科大学に勤務、同 19 年退職する。

東京支社時代、取材で同郷の安本美典氏と知り合い、邪馬台国九州説に共感、その後、九州の遺跡探訪中に福岡歴史研究会の大谷賢二理事長と知り合い、同研究会古代史講座を立ち上げ、講師も務める。同会の古代史イベントを担当、歴史ツアーなどを企画、運営。地元吉備にも興味を持ち、伝承を調査研究。現在、同研究会副理事長。現住所は岡山市中区。